

選手第一で考え、チームを支え続けられたのは「野球が好き、仲間が大切」という思いがあったから

なかの りゅうじ
中野 竜志さん 経営学部 4年次

大学における体育会系の部活動には、選手たちを陰で支える「主務」という役割があります。この6月に硬式野球部の主務の任期を終えた4年次の中野さんも、主務を務めた一人。幼いころから野球一筋の生活を送り、大学でもプレーヤーとして活躍することを夢見ていた彼が、なぜ支える側へと転向したのか。その経緯や仕事内容、いま振り返っての思いについてインタビューしました。そこには、支える側だからこそ得たやりがいと成長がありました。

野球を続けたくて甲南大学へ、入学前に起こったアクシデント

兄の影響で5歳から野球を始め、中学や高校でも熱中。ごく自然に、大学でも野球を続けたいと考えていました。甲南大学を選んだのは、ちょっと面白いご縁があつて親しみを感じていたからです。

実は、硬式野球部の谷口監督は、僕にとって昔から知っている近所のおじさん。小学生のころから、一緒に犬の散歩をする仲でした。大きくなってからはなかなかお会いする機会がなかったので、入部説明会に参加した時は驚かれましたね。早々に推薦入試で合格したため、高3の2月から大学での練習に参加しまし

た。強豪校からの同級生も同じように参加する中、早く認められたい！という焦りがあつたと思います。

高3の3月、大学での練習がない日、高校のグラウンドで後輩たちと一緒に練習しているときのことでした。ボールを投げた瞬間、肘に「ブチッ」という衝撃が走りました。

神経の損傷で、リハビリすれば治るだろうと言われたのですが、いくらがんばっても治らない。投げるだけでなく、打つのもつらい。高校時代はファーストで5番、打撃で攻めるタイプだったので、このケガは致命的でした。さあこれからというときに、大きな不安を抱えて入学することになってしまったのです。

2年次で学生コーチに転向。選手個々の弱点が見えてきた

大学入学後、ケガが治ることを期待しながら硬式野球部で練習を続けていたのですが、好転することはありませんでした。このまま選手としていても、チームの力にはなれない…。思い悩み、苦しんだ1年間で、監督に申し出て、2年次になるタイミングで「学生コーチ」に転向しました。

コーチといっても、周囲の選手たちは自分より強豪校の出身なので、技術的なアドバイスをする立場ではありません。ノックをしたり、ティーバッティングのトスをあげたりと、練習のアシストをすることが主な役割です。最初は自分がプレーできない箇がゆさを感じていましたが、次第に違う景色が見えてきました。

学生コーチとして練習にかかわっていると、一人ひとりの弱点がわかってくるのです。そこを強化できるよう、重点トレーニングメニューを工夫するようになりました。リーグ戦でエラーをしてしまった選手には、受けそこねた打球と同じノックで反復練習。次の試合でうまく処理できたとき、「ノックのおかげや、ありがとう！」と感謝されたことは忘れられません。

主務として練習試合を増やし、チームで手にした価値ある1勝

2年次では、学生コーチとともに「副

主務」も務めました。副務は、部全体のマネージャー的な存在である「主務」をサポートする立場です。副務の中の一人が3年次になったときに主務になります。僕は幹部の先輩方の推薦を受け、翌年に主務になりました。

主務の主な仕事は、道具の購入やグラウンドの整備、部費管理、他大学に試合を申し込むことなど。また主務とは別に、やっぱり野球が大好きなので、ノックやランナーコーチも引き続き担当していました。主務として、特に力を入れたのは練習試合を組むことです。甲南大学は決して強いチームではないため、常勝大学に申し込みの電話をかけても色よい返事ではないこともあり、粘り強い交渉が必要でした。試合経験を積むことがレベルアップへの近道と信じ、社会人チーム、高校生チームにも声をかけました。

そのかいあつて、今年の春季リーグでは、いい意味での「まさか」が起きました。強豪の天理大学に勝つたのです。そのあと、天理大学は優勝したのですが、天理大学に唯一の黒星を付けたのが甲南大学でした。それまで負けが続いていたこともあり、この価値ある1勝によってチームはお祭り騒ぎ。まるで優勝したかのよう

選手全員が、全力で、野球を楽しんでほしい

主務を務めるうえで一番に意識した



ことは、「選手第一」で考える心配りです。常に選手のみんなが練習に没頭できるように、自分が一番汗をかきやすいように心がけていました。120人前後のメンバー、誰一人埋もれさせてはいけません。特に1年次は、何をすればいいかわからないので積極的に声をかけ、チームの「一員なんだ」という自覚を育てるように気を遣いました。「いま調子がいいのは誰や?」と監督から聞かれることも多く、信頼されているという喜びもありました。

また、学生野球連盟の役員の方やスポーツ店の方など、社会人の方々との接する機会が多かったこともいい社会勉強に

なつたと思います。他大学の主務との交流も重ね、目上の方とも同年代の方とも人の輪が広がりました。

主務の任期が終わる6月まで、チームの戦績は芳しくなかったので申し訳ない思いもありますが、他大学の主務からは「甲南はみんな楽しそうに野球してるなあ」と言われることが多く、この雰囲気

ボランティアサークル「K'sサポーター「くまのみ」」
2022年4月に学内で立ち上がった「K'sサポーター「くまのみ」」。すべての甲南大生を対象として、より良い学生生活をサポートするボランティアサークルです。リーダーを務める入谷さんからは、立ち上げの経緯や活動への思いを。メンバーの一人、車いすユーザーの上農さんからは、障がいがある当事者としての視点も交えながら、実際に活動して得られた手応えなどを伺いました。

**視覚障がいのある学生の支援をきっかけに
すべての学生をサポートする団体へ**

もともと私は、「好奇心なら誰にも負けない」と言えるほどの「やりたがり」。大学入学後も、興味をもったボランティア活動に次々と参加していました。その一つに、学生の修学支援を行う「YOUステーション」からの依頼で、テキストデータを作成する仕事がありました。視覚障がいのある方のため、教科書をデジタル化する途中段階をお手伝いする作業でした。



全学生を対象に車いすの体験会を開催。

後日、この作業に参加した学生が集められ、学生部から「ボランティアサークルとして団体化しないか」というお話があったときも、まず思ったのは「今すぐやってみよう！」。そして、人をまとめるという初めての経験を積むチャンスととらえ、リーダーに志願しました。
みんなでゼロから活動方針や活動内容を話し合うのは簡単なことではありませんでした。が、次第に打ち解け、活

発に意見を交わせるようになりました。視覚障がいのある方への支援をきっかけに出会ったメンバーですが、今は全学生を対象に活動しています。

誰もが、誰かのヒーローになれる

7月には初めての試みとして、学内で「障がい者スポーツ体験会」を開催。健常者も車いすに乗り、ボッチャに似たスポーツであるベタンクと風船バレーを楽しみました。6月から、車いすユーザーである上農さんが「くまのみ」のメンバーに加わってくれたことも大きかったです。私たちも当事者としての視点をもつことができ、企画も運営もより良いものになりました。

また、私自身、これまで障がいのある人が身近にいなかったのですが、上農さんと親しくなったことで「障がいの有無にかかわらず、みんな同じだ」という思いが強くなりました。
次に考えているのは、秋の摂津祭で模擬店を出すこと。「手話の体験会や謎ときゲーム、お茶会、新入生対象の履修相談会などもやっていこう」と話し合っています。「くまのみ」のSNSアカウントに私が書いたメッセージは「その君、誰かのヒーローになりませんか?」。5年後、10年後、これから先もずっと、「くまのみ」から、たくさんの最高のヒーローが生まれることが私の願いです。

**これまでの経験を、イベントで
生かすことができた喜び**

日頃、自分がサポートを受けているYOUステーションの方から「くまのみに入りませんか」と声をかけてもらったときは、授業も忙しかったので迷いました。でも、自分が経験してきたことを生かせれば……という思いで参加を決意。

僕は生まれつきの脳性まひで、6歳のときから車いすを利用して使っています。15年も使っていると、もう完全に自分の「足」。車いすがあるからこそ、一人で大学にも通えるようになり、ぐんと世界が広がりました。でも街なかには、車いすユーザーにとって不便なことや、危険な場所がまだまだある……そんなことも「くまのみ」で伝えていきたいと考えました。

最初の大仕事「障がい者スポーツ体験会」で、ベタンクと風船バレーを提案したのは僕です。車椅子や歩行の訓練のため病院で過ごしていた子ども時代に、院内学級の体育の授業で経験したことがあり、これならみんなで楽しめるかと考えました。

当日は、僕がみんなの前で車いすの操作について説明。障害物を置いてジグザグに走るタイムトライアルも実施したのですが、速く漕ぐコツをアドバイスすると「本当に速くなった」と喜ばれました。自分の経験が生かせる喜びを初めて感じた瞬間でした。

**夢は化学の力で、障がいがある人の
自己肯定感を高めること**

今後は学内の危険な箇所についても声を上げていくなど、活動の幅を広げていきたいと思っています。入学後すぐコロナ禍になったため、1、2年次のころは友人の輪を広げる機会もなく、歯がゆい思いをしていまし



ボランティアサークル「K'sサポーター「くまのみ」」の面々。

た。3年次で「くまのみ」に参加したことで多くの人との交流が生まれ、やっと自分の大学生活が本格的に始まったような気がしています。
リーダーの入谷さんは4年次なので、来年は僕らで「くまのみ」を盛り上げていかねばなりません。メンバーをまとめるのが上手な入谷さんには、すぐには追いつけそうもありませんが、人前で話ができるようになったのは自分の成長だと思っています。
甲南大学の人はみんな親切で、実験棟への坂を上るときも多くの人が手伝ってくださることに感謝しています。また、通学時には毎日同じ場所から車いすを押してくださる卒業生の方も。そんな、甲南大学に流れる優しい空気が僕は大好きです。
僕には夢があり、化学の力を用いた車いすの素材改良などを通して、障がいがある人がもっと自由に活動でき、自己肯定感を高められたらいいなと考えています。そのために大学院への進学を希望し、この恵まれた環境の中で、夢に向かって学びつつ、「くまのみ」でも長く活動していけたら最高です。

サークルと研究、
どちらもがんばれと、
みんなの優しい空気が
背中を押してくれる

かみの あやと
上農 彩斗さん
理工学部 3年次

必要とされるとき、
いつでも
手を差し伸べられる
人になりたい

【リーダー】
いりたに ひなみ
入谷 日奈美さん
理工学部 4年次



学生さんと一緒に 話して、笑って、感動して…。 すべての瞬間が、私の宝物です

お昼の時間になると大学生協の食堂に立ち、とびきり明るい笑顔とよく通る声で活躍する香川さん。「おばちゃん、こんにちは!」「おばちゃん、元気?」と学生たちが次々に声をかけ、その周りには、いつもアットホームでなごやかな輪ができます。約30年の長きにわたり、甲南大学と歩みをともしながら食を通して学生たちを見守ってきた香川さん。その仕事への思いや懐かしいエピソードなどを語っていただきました。

事務職のパートから、 大きな仕事の責任者に

大学生協で働き始めたのは、今から30年ほど前。40歳になるかならないかの時期でした。事務職のパートとして売上の管理や日報の記録などの業務を担当していたんです。ところが、若いころから「仕事は与えられるものじゃない。自分で探せ」と教えられてきたせいか、つい何でも自分から動いてしまおうんですね。

大学生協は、学生食堂のほかキャンパス内で開催される学生会や懇親会、パーティーなどへも料理を提供しているのですが、当時の上司はオーダーを受けるのと、「承知しました。香川が打ち合わせに伺います」と答えちゃうんです(笑)。信頼してくださったのでしよう。「え?私が行くんですか!」とびつくり仰天し、参ったなあと思いつつながら、教授の研究室を打ち合わせのために訪ねたことを覚えてます。それ以来、学内のさまざまな規模のパーティーや食事で出される料理について、メニューの決定から食材の手配、調理の段取り、当日のテーブルセッティングまですべてを担当させていただいています。

今では、ありがたいことに「困ったら香川に聞け」と言ってくれる方が多く、留学生に贈るお土産選びなど、料理に関係のない相談が寄せられることも増えました。



甲南大学生協同組合

かがわ きみえ

香川 君枝さん

急げ! アイロンを求めて 自転車走らせた日

仕事を始めたころは、こんなに長くお世話になるなんて思ってもいませんでした。先生方をはじめみなさん優しい方ばかりで居心地がいいのもありますが、やはり、一番の喜びは学生さんたちの成長を間近で見られることです。振り返ると、驚くようなエピソードもたくさんあります。

20年ほど前のことです。一人の男の子が困った顔でやってきて「おばちゃん、アイロンある?」と。よく見ると手には、しわくちゃの黒いスーツ。「昼から企業訪問するんだけど、どうしよう」って。もう、大慌てでアイロンを取りに自転車で自宅へ戻り、何とか間に合わせて無事へ送り出しました。今では彼も立派な大人になっているでしょうね。懐かしいです。

最近、私も年をとったので「おばあちゃん」と呼ばれることもあり。お姉さんとは言わなくていいけど、せめておばちゃんにしてよ」と冗談交じりに言う、「だって実家のおばあちゃんを思い出すんだもん」と言うんです。あるとき、その子の友達が「え?お前のおばあちゃん?」と尋ねたら、「うん。俺の甲南のおばあちゃん」と。うれしそうな笑顔を見たら、おばあちゃんと呼ばれるのも悪くないと思いつきました。

さりげない瞬間を 学生さんと分かち合う

甲南の緑豊かで美しいキャンパスが好きて、時間があれば歩き回っています。あるとき、5号館近くの木に鳥がすんでいるのを見つけたんです。通りかかった学生さんたちに「見て、見て!鳥がいるよ」と言うと、「え?どこ?」と興味をもってくれて、しばらく一緒に観察しました。学生さんは「癒されますね」と言いながら、そっと写真を撮っていました。そんなさりげない瞬間が、いつしか大切な思い出になるんです。

毎年、3月になると「おばちゃん、卒業式来る?」と何人かの学生さんが声をかけてくれます。私が花を植えている花壇の前で待ち合わせして記念撮影をすることもしばしば。入学当初は、おしゃべりばかりして落ち着きのなかった子たちが、こんなに成長したかと思うと胸が

いっぱいになります。コロナ禍にあっても保護者のみなさんや先生方が丁寧に彼らを育ててくれた証です。学生さん自身も勉強や課外活動、就活にと努力を重ねたに違いありません。この30年、社会は大きく変わりましたが、学生さんの優しさやひたむきさは少しも変わっていないと思います。いつも私に元気を与えてくれる、愛しくてかけがえない存在です。

食堂のおばちゃんに 会いに来てください

2009年、多発性骨髄腫という血液のがんを患い、余命3年と告知されました。職場に戻ることもあきらめていたが、「早く帰っておいで」と声をかけていただき、1年数か月後に復帰。すると自分でも驚くほど元気になり、あっという間に13年の月日が過ぎました。好きでたまらない仕事が生きるパワーを与えてくれたと心から感謝しています。

かつては学生食堂のメニュー決めやスタッフのシフト管理を担当したこともありましたが、今は、先ほどもお話しした

ように学生会や懇親会、同窓会、課外活動の打ち上げなどへの料理提供が主な仕事です。でも、どうしても学生さんに会いたくて、お昼は食堂に立って交通整理。「まっすぐ並んで!」「おしゃべりしないで!」なんて相変わらず口うるさく注意して嫌がられています(笑)。できるだけ一人ひとりの学生さんを覚えていから、こっそり特徴や名前をメモしているのはここだけの秘密です。

コロナ禍でオンライン開催が続いている「オール甲南の集い」などの催しが再開し、卒業生のみなさんに会える日が楽しみです。おいしい料理と飲み物を用意して待っていますから、食堂のおばちゃんに元気な顔を見せにいらしてください。



お昼の学生食堂で、香川さんの笑顔に元気をもらった学生、卒業生は数え切れないほど。

生徒がより良い未来を歩むため、ICTには、そして私には、何ができるのだろうか

ICT教育部

株式会社甲南学園サービスセンター

いそがい もとき

職員 磯貝 基さん



コロナ禍で教育のデジタル化は一気に加速しました。甲南高等学校・中学校でも、授業において、1人1台タブレット端末やノートPCを活用しています。校内の快適なICT環境を陰で支えているのが、ICT教育部。その統括役だけに留まらず、愛情たっぷりに生徒の未来探しに寄り添う職員、甲南高等学校・大学の卒業生でもある磯貝さんにお話を伺いました。



行事の記録撮影に加え、ICT教育のサポートが業務の中心に変化

ICT教育部はもととメディア情報部という名称で、行事の記録撮影やパソコンのサポートが中心の業務でした。現在はそれらに加え、幅広いデジタル機器やネットワーク環境の整備、それらを駆使したICT教育のサポートが重要な仕事になっていきます。特に、2020年に1人1台iPadが導入されたからは、使い方の指導やトラブル対処、Web会議システムZoomを使用したオンライン授業時の「うまくつながらない」という保護者の方や生徒からの電話対応にもあたっています。最近では、ICTを活用して新しい授業を行いたいという先生の相談に応じ、どのような機材やアプリケーションを用いればよいかを提案するといった、ICTをより発展的に活用するための支援が増えています。

愛情をもってまいら

ICTの種が芽吹き始めた

私自身、甲南高等学校・大学の卒業生です。コンピュータには子どものころから興味があり、中学入学時にパソコンを買ってもらって本格的にハマりました。高校生のころから、先生のパソコンが壊れたと聞けば、「任せてください」と修理を請け負っていたくらいでした。自治会総務に所属し、議事録や図表を駆使し

た資料の作成などもマメにしていました。とにかく、自分ができるところで、人の役に立つことなら何でもやろうという気持ちがあっただけで、大学に入ってからOBとして中高に足を運び、後輩の相談に乗ったりしていました。そうした積み重ねが縁となり、先生からお声掛けいただいたので、2005年にメディア情報部(現ICT教育部)に入職することに。当時、兵庫県はICT人材を各学校に配置するという方針を掲げていたのです。その後、GIGAスクール構想に発展し、コロナ禍で教育のデジタル化が一気に加速。私自身、ICTを活用することで人生が豊かになったと感じましたので、生徒に1人1台iPadを導入できたことは大きな喜びでもありました。

※GIGAスクール構想/2019年に文部科学省が発表した教育改革案。義務教育を受ける児童生徒のために、1人1台の学習者用PCと高速ネットワーク環境などを整備する計画で、一人ひとりの個性に合わせた教育の実現が目的。

生徒たちには、学ぶことにICTを使うことが当たり前になってほしいと願っています。それでもできればクリエイティブに使ってほしい。ですから、コロナ禍の2021年に文化祭をオンラインで開催することが決まったときには張り切りしました。実際に、各クラス、各部活がこぞってオンラインのコンテンツを作成してくれました。生徒が自分たちで企画し、工夫して、Webサイトやゲームの作成、ダンス動画のコンテストなどが実現。私も技術面や見せ方などをサポートし、自分の中では大成功の手応えを得ました。生徒にとって、教育の場でインプットの機会は多い

のですが、文化祭がよいアウトプットの機会になったのではないかと考えています。

生徒の「やりたい！」を聞くとワクワクと胸が高まる

ICT教育のサポートに仕事の重心が移った今も、体育祭や文化祭、臨海学舎や六甲登山などの行事のカメラ・ビデオ撮影は重要な仕事です。私が入職時に決めた目標は「全員の写真を撮る」でした。それもできれば笑顔がいい。だからというわけではありませんが、「職員だから」「大人だから」という壁をつくりたくないと考えています。壁というのは、こちらの真意が伝わらず、相手に理解されていないためにできるもの。そのため生徒には、何事も丁寧に説明することを心がけています。

放送部には、行事の撮影に協力してもらう機会が多く、顧問ではありませんがアドバイザーのような形でかかわっています。部員からは、たとえば「臨海学舎で全員を撮影し、最終日に生徒ごとに選別した個々のアルバムを作って配りたい」「文化祭でバーチャルリアリティゴーグルを使った現実と仮想空間の3D合成(AR)を作りたい」といった相談を受けることがあり、その「やりたい気持ち」には全力で応えています。そういう子たちが大学の情報系学部に進み、ICT関連の企業に就職したという話を聞くと本当にうれしいです。最近では卒業生から結婚式に招いてもらう機会もあり、入社から17年の間で築いた生徒との信頼の絆を実感しています。



誰一人置き去りにせず、ICTを「良く生きる」ための一助に

学生時代は悩みの多い時期でもありません。私も悩みや迷いがあり、苦しい思いをした経験があります。そういう生徒の目の前を少しでも明るく照らしてあげたい。突き詰めれば、「良く生きてほしい」という願いをもっていきます。自分が学生のころも先生にいろいろな相談をして、一人の人間としてかわかってもらいました。今も心に残ることがあったりします。今度は自分がその立場になって、生徒たちに返していかなければと思っています。

またICT教育については、大多数の生徒が好意的に受け止めていますが、一方で勉強のためにiPadを与えられたことで「面倒くさいもの」という認識をもち、うまく活用できていない生徒が少数ながらもいます。なかなか目の届かない、そうした課題をもつ生徒を何とかしてすくい上げ、興味をもってもらえるよう働きかけていきたいと考えています。iPad導入から2年が経過し、ICT授業の内容は進化しています。それが実際に学びの質をどう変えて、どのように生徒の将来の幸せにつながっていくのか。今後とも注視し、改善や支援に力を入れていきたいです。